

## 私の保育



岩 淵 静 江

はじめに

幼稚園で幼児といっしょにすごした三年間は、無我夢中のうちに過ぎてしまいました。これから育っていくとする幼児とともにすごせたことは幸せなことだったと思います。反省したり、もっとこうすればよかったのではないかと思ったり連続でしたが、特に最初の二年間は失敗ばかりでした。はじめての入園式の日、新入園児の胸にひとりずつ名前をよびながらバッジをつけてあげましたが、その時の幼児の目の輝きをみてとても新鮮なものに出会ったような気がしました。その日から幼児と私とのふれあいが

はじまったわけですが、その間いろいろなことがありました。

あるてきことを通して……

年少児が入園してまもないある日のこと、クラスのH君がいなくなりました。さあ、たいへんと主任の先生や用務員さんにおねがいしてあちらこちらを探していただきましたがありません。ほんとうにどうしてしまったのかと心配しておりますと、H君のおかあさんがH君を幼稚園に連れてきてくださいました。H君の顔をみてほっとしたのと同時に、

「H君どうしてせんせいにだまっておうちへかえったの」  
ときびしく注意をしました。ところがH君はなぜ叱られて  
いるのだからさっぱりわからないといった様子で、私に話  
をするのです。

「せんせいね、ぼく、ようちえんであそんでいたらのど  
がかわいちゃったんだよ。だからおみずがのみたくなっ  
て、おうちへいったんだ」

と、注意しようとしている私に楽しそうに話すのです。

H君にとって幼稚園とは今まで遊んでいた広場や公園と同  
じように、いつでも自由に行ったりきたりできるところだ  
ったのです。注意しようとしていた私は、啞然としてしま  
い、

「ねえH君、お水が飲みたければ幼稚園の水道で飲みま  
しょうよ。こんどからおうちへかえったりしちゃだめよ」  
といいますと、

「なーんだそうか。こんどからはおうちへかえらないよ」  
とにこにこしながら話すのです。

それからこんなこともありました。

入園してから一か月程たち、少しずつ幼稚園生活に慣れ  
た頃、おべんとうがはじまりました。どの幼児もはじめて  
のおべんとうとあって、朝から、

「せんせい、いつになったらおべんとうなの。ねえまだ  
なの」

と、しきりにききにきます。いよいよお昼になりどの幼  
児もうれしそうに支度をして食べはじめました。ひとり、  
Y君だけは、保育室に寝ころんだり歩いたりしておべん  
とうを食べようとしません。

「Y君みんなといっしょにおべんとう食べましょうよ」  
といっても、少しも食べようとしません。きつと新しい  
活動だからで、もう少しすればみんなといっしょに食べは  
じめるだろうと思っておりましたら、翌日も食べないので  
す。降園の時間におかあさんに話しをしましたところ、

「実はせんせい、Y夫は、せんせいがおべんとうを食べ  
ないからぼくも食べないんだよ。せんせいはおべんとうが  
なくてかわいそうだから、おかあさん、せんせいの分もつ  
くってよとY夫が話しをするのです」

このことでした。私どもの幼稚園の職員の昼食は、小学  
校の給食で、幼児の昼食の時間よりだいぶ遅れて食べる

か、もしくは幼児が帰ってから食事をしていました。Y君のおかあさんからそのことをきいて、私もおべんとうをもってきて、幼児といっしょに食べるようにしました。するとY君もいつのまにか、みんなといっしょにおべんとうを食べはじめたのです。それまではみんなといっしょに行動しない勝手なことをするわがままな幼児だと内心想っていた私は、とても恥ずかしくなりました。

T君とのふれあいも強く印象に残っています。私が就職して三年め、T君は年少組に入園してきました。入園式が終り、毎日登園してくるようになって、T君はげた箱の前にカバンをさげたままで、靴をはきかえようともせず黙って立っただけです。手をとって話しかけても同じように黙って横を向いているだけです。げた箱の前に立っただけの日が五月にはいるまで続きました。私はなんとかT君に反応してもらいたいと思い、話しかけたり、からだにふれたりなどあれこれ考えて接してみました。あいかかわらず横を向いたままです。これがもし新卒の時であつたら、T君はなんと変わった幼児なのだろうと内心イライラしてし

まったかもしれせん。でも私の幼児に接する気持ちの中に、少しづつ幼児の行動をあせらずに待つゆとりが生まれてきたのでしょうか……。今はT君は、私とはもちろん、他のだれとも口をきかず視線をあわせようもしない、けれども、もうしばらくすれば話をしてくれるようになるに違いないと信じていました。

五月にはいり、T君はやつと保育室の中にはいるようになりしました。けれどもじつとそのまま自分からは何もしようとはしません。とうとう一学期のあいだ幼稚園のだれとも口をきかず、私が「T君こうしましょうね」と手をとる以外の行動は、しないままに終ってしまいました。幼稚園でのT君の態度が気にかかっていたので、家庭訪問ではいろいろとおかあさんと話したり、T君の様子をみてきました。家庭では兄弟と楽しそうに話しながら遊んでいるのです。また幼稚園の帰りなど、T君はおかあさんに楽しそうに話をしているのです。それが私の姿をみると同時に口をかたくとしてしまい、下をむいてだまってしまふのです。そんなT君をみて、いささか私も不安な気持ちになりました。

二学期にはいり、今まで幼稚園ではだれとも口をきかな

かったT君が、友だちと話したりふざけあうようになりました。そんなT君の姿をみて、それぞれの幼児の発達にあわせて見守ってあげることが大切なのだと感じていました。しかしT君は、楽しそうに友だちと話している時に私の姿をみつけると、急にだまってしまい下をむいてしまうのです。

三学期にはいり、T君は友だちとも話をし、自分から行動できるようにになりました。しかし私に話しかけることはありませんでした。いつも私がT君に話しかけ、T君がうなずいたり首を振るだけでした。

T君とはなんとなく物足りない気持ちのまま退職し、四月の離任式に出席した日のことです。帰りには、ひとりりひとりの幼児と握手をして別れました。門にいくまで歩いていく幼児をみつめる私に、みんな手をふってくれました。その中でもひとときわT君の姿が印象的でした。一年間私にはひと言も口をきいてくれなかったT君が、自分から私のところに走ってきて握手をし、大きな元気のよい声で「さようなら」といいながら、手を振ってくれています。

毎日T君の手をとって話しかけてきてよかったです。どうせT君はいくら話しかけても黙ったままなのだからしかたが

ないと思いつつT君から心をはなさくて本当によかったです。もし途中でT君から私が離れてしまっていたなら、離任式の日T君が私に握手を求め、さようならと元気に手をふってくれたとしても、何の感動もなかったにちがいません。

### ひとりりひとりの幼児のあるがままの姿を

受け入れることが教育の基本では……

これらの経験からつくづく教師が勝手に極めつけてはいけない、自分の思うように動いてくれないからといって、困ったものだと思うことは大まちがいと痛感しました。幼児は教師に愛されているのだ、ぼくのせんせいはいつともぼくのことを見守っていてくれるのだという気持ちをもてれば、幼児自らも持っているものを十分発揮してくれるのではないのでしょうか。教師と幼児との安定した関係の中で、幼児は友だちと交わり自分の力をだしきってのびているのではないかと信じています。

(元江東区立第三大島幼稚園)